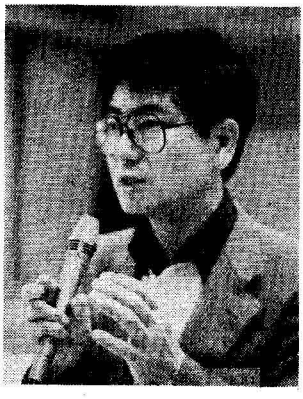
全体講義

現実に切り込む企画とは

中高年雇用・福祉事業団
（労働者協同組合）全国連合会
松沢常夫



いま、日本では、もうけ主義の矛盾が噴出しているように思います。政府、政権党が平気でウソをついて消費税を強行する。リクルートのようなことは「常識」とされる。軍備が拡大され、環境が破壊され、農業がつぶされ、人間性がむしばまれています。自分さえよければいい、自分さえもうければいい、というこの世の中はどうしても変えなければならないところにきていると思います。

私たち中高年事業団は、もともとは、全日自労という労働組合が失業者の仕事の場を確保する運動の一つとして始めたものですが、今日では、労働者協同組合、つまり、だれかがもうけるためではなく、働く者が協力しあって、町に役立つ良い仕事をし、賃金（分配金）や出資・配当をどうするかなどもふくめて管理・運営を自分たち自身で決めていく、労働者が主人公となって運営する企業です。

いま、もうけ主義の世の中を批判しつつも、もうけ主義の企業に雇われる以外に生きることはできない、〝よりよく雇われるための競争〟をするしかない、と思っている人たちがほとんどだと思います。しかし、私たちの労働者協同組合運動は、お互いが協力し、世の中のためになる仕事をおこし、そこで働き、立派に生きていく道がある、ということを証明しつつあります。労働者協同組合は、もうけ主義企業に対する民主的規制の一つの力にもなっていると思います。

事業高はまだ七十億円、団員七千人というところですが、労働者協同組合という新しい方向は、今日のテーマである「現実に切り込む」「現実を変革する」うえで、一つの有力な武器になりうる、という確信を私自身も強く持てるようになりました。この確信をつくりだすうえで、重要な力になってきたのが、機関紙『じぎょうだん』です。現在、月二回タブ八ページ（一部百円）ですが、八千人の読者がいます。

私は二年ほど前、全日自労の『じかたび』新聞から『じぎょうだん』新聞に移ってきたわけですが、私が担当した二号目から現在まで三十七回（7月15日付）つづいている「捨てるゴミの向こう」という連載企画が、「現実に切り込む企画」の一つの典型でもあると考えますので、今日は、この企画のことを中心に、お話ししたいと思います。

捨てるゴミの向こう

事業団では、公園・緑化、生協関連、福祉関連、土木・建築、リサイクルなどさまざまな仕事をしていますが、病院を中心にしたビルメンテナンスの仕事を相当手がけています。その病院清掃の仕事中におこった出来事を記した手紙から、連載は始まりました。手紙には、お医者さんの部屋の「燃えるゴミ」のカンから紙くずを出そうとして、割れた瀬戸物で手をケガしたこと、ダストシュートから落ちてきたゴミを焼却炉に引きよせようとしたとき、割れたガラスが指の間に刺さったことなどが書かれており、結びにつぎの訴えがされていました。

「相手の姿が見えないと、人間って無責任になるようだ。『捨てる人たち』に、もっとアピールしたい。『捨てるゴミのむこうにも人がいる…』ってことを」

じつは、これを書いたのは私と机を並べて仕事をしていた田中夏子さんという若い女性です。現場から帰ってきてこの話をするので、すぐ書いてもらったわけですが、私はこれを一面に大きくのせました。普通なら、「読者の声」の欄の一つ、という扱いになるのでしょうが、「捨てるゴミの向こうにも人がいる」というこの提起の大切さ――その時はまだ深くつかめていなかったのですが――を思って、一面にもってきたわけです。

この記事は反響をよび、「瀬戸物どころじゃない、注射針がゴミ袋に入っていて、いつも危ないめにあっている」という声も寄せられました。それで、「連続追及／捨てるゴミの向こう」というタイトルをつけて、毎号のせ始めました。

ちょうど三重大学医学部附属病院でお医者さんが注射針をまちがって刺し、B型肝炎で急死する事故

がおきたということもあって、この企画は、社会的にも注目をあつめるようになりました。しかし、ビニール袋に注射針が捨てられ、針が袋を突き破って出ているところの写真やビニール袋に捨てられていたり、一般のゴミにまざっていた針やビンの破片でケガをした団員の声など、ひどい実態をのせる一方、そういう状況のなかでもこう改革してきたところもある、という例をのせた段階で、とくにのせるべき新しい内容というのはなくなってしまいました。

「後追い新聞」なら、ここまでなのでしょうが、問題は何も解決していません。「こんなことはありませんか」と、御用聞きのようなことをしていてもだめです。そこで、私は仕掛け人になってみました。

「院内感染防止の対策会議をやってほしい」とか、いろいろたのむわけです。そうすると、現場では、私の提起した以上のことを考えてくれます。

厚生省に話しあいに行って、それを記事にする、ということもしました。マスコミの記者にも会いに行きました。ある記者からは「アンケートをとってみたらどうか。客観データが出ればわれわれも扱いやすい」という助言をもらいました。これはいいと、さっそく、紙面のほぼ一ページをつかって、「注射針事故を防ぐためのアンケート」をのせ、これに書きこんで、送り返してくれるようよびかけました。

「この一年間に何本くらいの針を拾ったか、どこで拾ったか、何回くらい刺したか、どういう作業のときか、どう治療をしたか、職場長や病院への連絡はどうしたか、病院や厚生省への注文は何か」など、一人ひとりにかなりくわしく書いてもらうものでしながら、とくに催促もしないのに、わずか二週間ほどで、当時、事業団が清掃をしていた四十二の病院のうち四十の病院、二百二十三人から回答が寄せられました。そして、「三人に一人が針を刺したことがある」などの驚くべき結果が明らかになりました。

この結果はマスコミや業界紙でも報道され、官庁、医療器具メーカー、商社、研究者などから問い合わせがあり、都職労の新聞や東京民医連の新聞もとりあげてくれました。学会、研究会で報告してほしい、というような要請もあいつぎ、いろんな人に行ってもらって、それをまた記事にしました。

その後、病院で働く人たちみんなが協力しあって安全な病院をつくっていく努力をしようと、婦長、事務長、労組役員と事業団員との懇談会をやる、病院に改善提案を出す、というようなことが、紙面の企画と現場での運動との相互作用のなかで広がっていきました。さらに、改善がどうすすんだかを、第二回アンケートで調査し、現場では、〝そのまた向こう〟の問題――医療廃棄物の最終処理のあり方を確立するためにどうしたらいいのかを考えるところまですすんできました。

変革の意欲に燃える

こうした経過から、「現実に切り込む企画」を考え

前号で紹介したNHK「おはようジャーナル」に登場された関東逓信病院組合婦人科部長・岡田療医学博士にお会いしました。岡田先生は、ものすごくいそがしく、ひっきりなしに電話もかかってくるなかでしたが、つぎのように話してくれました。

連載 捨てるゴミの向こう —38—

これだけ大きな病院になると、看護婦さんに聞いてもゴミ置場がどこか知らない、守衛さんにたずねて、やっとさがしあてた。「手術場ゴミ」の袋には血液がたまっている。適明な袋だからわかるが、そうでないところはどうなっているのか。

関東逓信病院 婦人科部長 岡田 淳さんに聞く

分別は職員の大切な仕事

「廃棄物による感染防止など、職員のあいだでは注意を徹底していたが、そうにをする人、ゴミを集める人のことは意識の外にあった。処理に当たっては、職員のあいだでは注意を徹底していたが、そうにをする人、ゴミを集める人のことは意識の外にあった。処理に当たっては、職員のあいだでは注意を徹底していたが、そうにをする人、ゴミを集める人のことは意識の外にあった。

から、徹底して対策をとってきた。

院内については、まず婦長を集めて教育した。分別するということは、仕事量がふえることだが、これは、われわれの大切な仕事だということを強調した。

外国からとりよせたゴミ袋

血液のついたものなどは二重にしたビニール袋に入れ、熱処理で滅菌してから出すことにしたが、中が見えるよう透明の袋で、丈夫で、熱に強い袋がなかなか、結局、外国からとりよせた。

これらの処理については、医療廃棄物専門業者から入札をとったが、現在の処理費用用の五倍は最低でもかかるみこみだ。

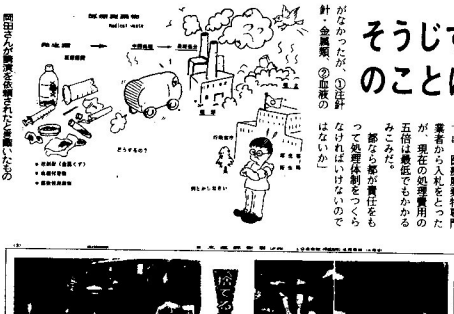
都なら都が責任をもって処理体制をつくらなければいけないのではないか」

捨てるもの

ついたガーゼなど、③点滴ビンなど汚染されていないガラス器具というぐあいに分けた。

そうじする人、ゴミを集める人のことは意識の外だったが…

分別のしかたも認識がなかったが、①注射針・金属類、②血液の



岡田さんが廃棄を依頼されたと称されたもの

注射針拾得状況一覧表作り報告

小豆沢病院現場

【東京】小豆沢病院の現場では「注射針拾得状況」という表をつくり、何日にどこでどのような（キャップのあるなし）針を拾ったか、ひとめでわかるようにして、毎月、病院に報告しています。

一部の病院が利用しているにすぎない。環境や健康への影響大きいため、処理機関の整備と関係者の専門教育が急務となってきた。

処理機関の整備を

日本経済新聞も特集

日本経済新聞は四月から特殊容器で回収し高温で焼却する廃棄物処理会社や滅菌代行業が各地で営業を始めて いるが、費用が高く、

に「医療ゴミ」を写真特集。

「医療廃棄物は野放し状態。契約先の病院

翻弄される医療者の専門教育

と、矢後滋記者が書いています。

全府一本めざす

京都高齢者事業団が結成

【京都】七月二日、京都高齢者事業団の第二十一回定期総会を、事業団の屋内作業所で開き、九十五人の団員が参加しました。

来賓のあいさつのあと、太田事務局長が決算報告、田中事務理事が、経過報告と方針を提案しました。

「団を民主的に運営するために、職場代表者会議をつくることを決め、三回の会議を開いてきましたが、十分その機能を発揮するこ

とはできませんでした。人手不足は深刻で、五十七人入団しましたが、四十六人退団し、夏場の草刈り、新しい清掃の現場など、毎日、頭を悩ましています。

方針では、経営基準をしっかりまもること、職場代表者会議を系統的に開いていくこと、という従来の基本方針をつらぬきながら、今年度のあらたな提案として、①全府一本の高齢者事業団をつくっ

京都の中央病院現場の仲間

「よい仕事」を交流

福岡集会に74人参加

【福岡】福岡県にある事業団の「よい仕事・団づくり交流集会」が六月二十五日、船屋 都須恵町で開かれ、七十四人もの仲間が参加しました。

事業団全国連合会の

てみたとき、どういう教訓を導きだしたらよいのか、私はつぎのように考えています。

一つは、編集者の主体性、編集者自身が変革の意欲に燃えているかどうか。裏返すと、機関紙の発行母体である団体自体が、編集者が燃えるような思いをもてる組織であるかどうか、ということが決定的だということです。

私は、全日自労から事業団に移ったとき、事業団の永戸祐三事務局長から「松沢の好きなように思いきってやってくれ。ただし、条件が二つある」といわれました。その一つは、一面に「本号から松沢常夫が編集長」と大きくのせる、ということ。しぶっていたのですが、事業団員である妻から「いいじゃない。事業団は一人ひとりが責任をもってやるところなんだから、はっきり出したら」とシッタされてしまいました。もう一つは、「編集長の決意として、『命がけでがんばる』と書け」というもので、これ

事業団の 低賃金
だれがどうすれば上げられるか

も書きました。

そのせいかもしれませんが、この連載のなかで、私は再三、顔も名前も出して記事を書きました。連載していると情報も私のところに集中してきます。私は、「単なる下請企業でも、労働組合でもできない、事業団・労働者協同組合だからこそやれる追及だ」「全国のビルメン労働者、底辺の労働者の地位向上はここから始まるんだ」「それを、おれが先頭になって切り開くんだ」……そんな気負った気分にさえなってきました。

机を並べていた先ほどの田中さんに、「機関紙というのは、後追い新聞だと思っていたけど、松沢さんの仕事をみていると、機関紙は組織者なんだと思えてきた」といわれました。「松沢が組織者だってよ」と永戸事務局長には笑われましたが、私は〝一つのことをやったんだな〟という感激に、しばし、ひたることができました。

読者が機関紙に期待を持つとしたら、それは、編集者に期待しているということだと思います。編集者がどんな人間か、信頼できる人間か、勇気のある人間か、読者は紙面を通じてよく見ています。編集者自身が何をしたいのか、何をしようとしているのか、それが不明確だったり、「私は書記だから」とか「組合員に雇われているんだから」などといって、いつも半歩下がって構えている、そんなことでは、「現実に切り込む企画」など望むべくもないのは明らかでしょう。困難は多いと思いますが、編集者自身が前に出て、読者と正面からぶつかりあいながら、読者の共感と参加を組織し、夢と展望を共有するところまでいかなくてはと思うのです。

自分しか見えない現実

二つめに、この注射針などによる事故を解決するためには、医療行政の改革や廃棄物処理対策の確立なども必要だが、当面のポイントは、病院関係者がもっともお互いを知りあい、協力しあうことである、という認識で追求したことがよかったのだと思います。

これは、私たちが切り込む対策の「現実」をどう見るか、ということにもかかっています。資本主義は下請構造を発展させ、労働者内部に差別をもちこみ、分断してきました。公害企業の労働者が、自分の身体もむしばまれているのに、住民を弾圧する側にまわったという幾多の例が示すように、労働者と住民を分断してきました。労働者は、視野を狭められ、〝自分さえよければ〟という思いにさせられ、結局、自分の身も守れない状態におかれてきました。

注射針についても同様で、針をつくる労働者、納入する労働者、それを使う労働者、掃除する労働者、それを集める労働者、廃棄する労働者……というぐあいに分断され、自分だけの「利益」「安全」にしか目がいかないようにさせられてきました。病院の清掃をしている事業団員も、集めたゴミが最終的にどこでどう処理されているのかは知らないわけです。

一つの物の流れ、仕事の流れというのは、労働者の連関の中にあるし、よい仕事をしよう、責任をもった仕事をしようと思ったら、その連関をとらえる総合的な視野をもたざるをえないのに、労働者は企業や業種・職種によって分断され、自分の仕事の範囲のことしか見えなくなっている。

だから、こういう「現実」を打ち破るためには、労働者どうしが連帯する契機をつくりださなければならない、と考えたわけです。連載の初めから、そういうことを深く考えていたわけではありませんし、ズサンな病院を徹底的に告発してやりたい思いにかられたことも何回かありました。しかし、編集者のウップン晴らしになるだけでは意味がありません。

やはり、清掃をしている労働者自身が、「下請だから」とか「お掃除だから」とかいって自らを卑下しがちになることをやめ、「病院と事業団とは、よい病院をつくっていくために提携しあう関係」であり、「自分たちも病院を支える主人公の一人」であって、「安全できれいな病院づくりの先頭に立っている」という誇りをもてるようにすることだ。それには、現場の団員自身が病院職員と積極的に話しあう、改善提案をする、という運動が必要だ、と考えていったわけです。

実際に病院職員と懇談してみると、無口に見えた清掃のおじさんたちが胸を張って「わしが〝どうだい〟と声をかけて入っていくと、病室中が明るくなるんじゃ」とか話します。「告発」でも「グチ」でもなく、連帯の立場で話しあい、知りあう、その中から、看護婦さんたちの中でも、仕事の見直しが始まりました。

「このあいだまで看護婦をしていましたが、いそがしさを理由に、ゴミの捨て方に注意をはらったり、あとの処理を考えることなどなしに仕事をしていました。同じ病院で働く仲間として見ていれば、何らかの方法でもっと早く対処できたのではないかと思います」(元看護婦)「私たちは刺したときでも、この患者さんのなら大丈夫とか危ないとかわかるけど、捨ててある針だと、だれのだかわからない。だからなお大変なんだということを看護婦一人ひとりに気づいてもらうようにしなければ」(婦長)。こんな記事がのりました。

また、『捨てるゴミの向こう』の提起で何が変わったか」という中間総括の座談会を事業団内部でやったのですが、団員がまっ先に語ってくれたのは、このキャンペーンへの賛歌でした。「看護婦さんの新人教育の中に針のことがとり入れられ、事業団も感染防止の学習会を計画してほしいと病院の方から提案された。新聞連載が始まってからこうした状況が生まれてきたわけで、私たちが、ただ清掃をしている団体ではなく、社会的に意味のあることを提起していく団体だと実感した」「新しく事業団がやるようになった病院で、生ゴミも針もビンもゴチャゴチャに捨てられていた。あまりひどいので、時間をかけて話していこうと思ったが、新聞連載のコピーを渡したら、いっぺんに改善された。口でいうより、新聞記事をわたして納得してもらえた」「こういうキャンペーンができるということに誇りを感じた」

これを機に、病院職員などに新聞の拡大も大いにすすんだわけですが、「現実を変革する」とは、まさに、人間を変革すること、人間と人間の関係を変革する努力であると感じるわけです。

話しあえる場をつくる

教訓の三つめは、「現実を変革する」には「運動」だけでは不十分で、「事業化」するところまでいかなければならないのではないか、ということです。

「注射針アンケート」について、注射針メーカーや商社から問い合わせがあったと話しましたが、安全な処理システムをどうつくるか、政策的にも事業的にも〝こうすべきだ〟し、〝こうやれる〟というものを、私たち自身が打ち出せるだけの力を持たねばならないと思います。

事業団に来るまでは、そんな発想を持ったことがありませんでしたし、これからの課題ということですが、注射針問題のキャンペーンも、この段階までわずかの期間でたどりつくことができました。

このほかの好評企画としては、「便所掃除の現場から考える」シリーズがあります。これは、「罰で便所掃除をさせられる」という学校の話を聞いて、住井すゑさんにインタビューしたところから始まるわけですが、これも、労働者が差別、偏見をなくして、連帯の立場に立とうという提起だし、労働条件の面でも、〝よごれ仕事〟をする人の賃金はもっと高くなければならない、ということなどに結んでいかなければならないと考えています。

ついでにいうと、このインタビューがきっかけになって、住井さんから旧作の少年少女小説を「よかったらつかって下さい」といただくことができ、連載しています(一部は、『わたしの少年少女物語』=労働旬報社=に収録された)。

もう一つ、「ホンネの討論」の連載は、まだ二回目ですが、二ページ分くらいを使って、幹部と一般の団員とが、事業団のあり方、働くことの意味と働き方、賃金・労働条件などをめぐって議論しています。「あなたは現実を知らない」だの「事業団も結局は高齢者を使い捨てにしている」だの、お互いの現実認識と価値観とを明らかにしながら〝やりあう〟なかで、労働者協同組合とは何なのかを心底からつかみ、一人ひとりが主人公になって、労働条件の改善なども本当にやれるようにしよう、事業団で大原則にしている「徹底民主主義」を紙面でリードしようと考えて始めたものです。これも、大反響をよんでいます。

とてもそんなことはできない、という団体が多いのではないかと思いますが、私たちの新聞は、情報を知りあい、考えあい、みんなの力で少しでも世の中をよくするためにあるのだと思います。そこには、当然、民主主義、オープンな姿勢が求められるし、逆にいうと、そうしたオープンに話しあえる状態を組織の中に一歩一歩つくっていくためにこそ機関紙がある、ともいえるのではないでしょうか。

私もいっそうがんばることをお約束して、私の話を終わらせていただきます。